目次

＊＊はじめに＊＊
＊＊「ヌーソロジー」の簡単なおさらい＊＊
・次元観察子の階層構造
・奇数系は「自己・精神」寄り、偶数系は「他者・物質」寄り
・ケイブコンパスについて

＊＊ユング精神分析について＊＊
■ユング心理学の有り様について
・ユングとはどんな人か？
・河合隼雄さんの功績
・推奨文献
■ユング心理学の内容（元型論）
・「元型」について
・「シャドウ」について
・「ペルソナ」について
・「こころ（Soul）」について

・「アニマ」と「アニムス」について
・「自己（Self）」について
・自己実現の道の危険性について
・「トリックスター」について
・「大母（グレートマザー）」と「老賢者」
・父性原理と母性原理
・『次元観察子』と「元型」の関係
・内向タイプと外向タイプ
・「オタク」と「リア充」についてなど
・4つのタイプ
・「火」「水」「風」「土」とケイブコンパス
・「夢」について
・「集合無意識」について
・「コンプレックス」について
・「シンクロニシティ」について
・「カイロス」と「クロノス」について
・「マナ人格」について

＊＊フロイトについて＊＊

・フロイトについてざっくりと

・「リビドー」について

・「自我」・「エス」・「超自我」について

・「エロス」と「タナトス」

・「転移」現象について

■これまでの用語まとめ

・オススメのうつ病本

・うつ病治療法は大きく分けて二つ？

・「ウコン」と「てぇげぇ主義」

・睡眠不足という社会問題？

＊＊ラカン精神分析編、はじめに＊＊

・ラカンとはどんな人か？

・「人間は人間でないものを知っている」

・ラカンの読み方について

・ラカンの難しい所

・西洋の外から見るラカン
・推奨文献

■ラカン心理学の内容（鏡像段階論とＲＳＩ）
・「鏡像段階論」について
・「エス」と「主体」について
・「想像界」と「象徴界」について
・数列を使った象徴界の例え話
・「現実界」について
・映画「マトリックス」の比喩

■ラカン心理学の内容（名とイメージの関係とシェーマＬ）
・「シニフィアン（名）」と「シニフィエ（イメージ）」
・シェーマＬについて
・シェーマＬにある二つの線
・言語を「作る」世界と、言語を「使う」世界
・ラカンの精神分析が目指すもの
・「三人の囚人の寓話」について
・「三人の囚人の寓話」の問題点

・「論理の時間」について
・二つの「時間」の方向性

■人間の自我構造の発展
・人間の自我形成の仕組み、その１：空間認識のレベル
・人間の自我形成の仕組み、その２：上位レベル
・オンラインゲームとの対応
・「ペルソナ」と「こころ」

■４次元で読むラカン
・「４次元」で読むとラカンは分かりやすい？
・「４次元空間」とは？
・「４次元空間」側の「シニフィアン（名）」を見る
・仏教の「止観」について
・「対象ａ」について
・「対象ａ」はヌーソロジー的に言うと何か？
・「まなざし」としての「対象ａ」
・「人間の欲望は《他者》の欲望である」
・親鸞の「他力本願」について

・「黄金数」の話
・メビウス構造

■「父の名」や「ファルス」について
・ラカンによる「オイディプス・コンプレックス」解釈
・「ファルス」について
・「去勢」について
・「父の名」について

■これまでの用語まとめ

＊＊オイディプス編、はじめに＊＊
＊＊アドラーについて軽く＊＊
・アドラーとは？
・「岸見一郎」さんなどの影響
・「劣等感」について
・「劣等性」と「差異」とについて
・「共同体精神」について
・「共同体精神」にある階層構造

・能動的に生きるということについて
・「オイディプス」とは何か？
・神話「オイディプス王」の内容
・「オイディプス王の神話」から「オイディプス・コンプレックス」へ
・著書「アンチ・オイディプス」について
・「アンチ・オイディプス」における「オイディプス」とは？
・「父なるもの」と「西洋」の関係
・ヌーソロジーにおける「思形と感性」
・「母なるもの」と「東洋」の関係
・「神道」の持つ二面性について
・「母なるもの」への父性の上書き
・ジャパニーズ・オイディプス・コンプレックス
・「アンチ・オイディプス」とは何か？
・現代日本で権力を持つもの
・「学校」と「メディア」について
・「医療」について
・「政治」について軽く

・「学校」「メディア」「医療」の3つについてまとめ
・父性側が重視するもの
・母性側が抱えるもの
・実例が書かれた文献について

■「物質的な軸」と「精神的な軸」について

・二つの軸について
・アーリマン的な力とルシフェル的な力
・政治における二つの立場
・「2つの軸」と仕事について
・産業の発展による構造の変化
・仕事をするということは、「人と関わる」ということ
・「二つの軸」の理想的な在り方
・必要な「知性」とは何か？
・学校で習う科目について
・学校で習うことで重要なもの
・学校で習うことで重要でないもの
・「理科」と「社会」といった科目についてなど

・「丸暗記」の仕組みとその逆となるもの
・「ヌーソロジー」で求められる知性
・「暗記」と「虚栄心」
・正直、大学を卒業しないでも、それなりに仕事をして生きていける世の中になって欲しい

＊＊魔術・オカルティズムとの絡みなど＊＊

・魔術のカウンターカルチャー的側面
・「勇気づけ」の手段としての魔法
・4種の「オイディプス」的な弊害について
・「星の力」を借りて生きる
・フロイトのやり方とユングのやり方
・「仏教」について
・「日本神話」で表現されていること
・隠れた「月」の力

＊＊はじめに＊＊

本書のタイトルは「**ＮＯＳとＮＯＯＳの精神分析**」である。本書は、宇宙論『**ヌーソロジー**』の概念と、「**ユング**」や「**ラカン**」といった精神分析で語られていることをすり合わせて考えてみる・・・というのが主な目的である。

タイトルにある『**ＮＯＳ（ノス）**』と『**ＮＯＯＳ（ノウス）**』とは、「ヌーソロジー」に出てくる用語であり、「宇宙に流れる根元的な二元性」のようなものである。精神分析において、現場で「精神病」と扱われるものでも、宇宙論のような「世の中全体」の枠組みから捉えて解釈すると、それは「精神」と「物質」であったり、「個人」と「社会」であったり、「父性」と「母性」であったり、「神」と「人」であったり、「自己」と「他者」であったり・・・と、普遍的な「二元性」の問題が、個人的な問題とも関わっていることが分かってくる。従って、精神分析というジャンルを、このような「宇宙論」と絡めて捉えてみることで、何か新しいことが分かったり、新しい手段が見えてくるのではないか?ということで、これについて突き詰めてみる。

また、「ヌーソロジー」で語られている概念は、決して、人間の世界とは無関係なイデアの物事を語っているわけではない。むしろ、ユングやラカンの精神分析のような、一般の人が無意識の世界と向き合った時に出てくる、ドロドロしたものと密接な関わりがあるものだと思う。むしろ、ヌーソロジーで「高次元」として扱われるものは、人間にとってドロドロしたものと関わりなく向かうことができるものではない。ヌーソロジーはどの辺をフォーカスして扱うかによってその印象は変わるが、そこは言い切っても良い。ヌーソロジーは「精神分析」的なジャンルを必ず通過するということは、逆に言うと、ヌーソロジーが、こうした分野にも役に立つということの裏付けにもなる思う。

本書は、三部作構成で「**ヌーソロジー×精神分析**」というジャンルについて書いていくことにする。**一部目は「ユング」**について。**二部目は「ラカン」**について。**三部目は「オイディプス」**という概念についてである。

早速、一部目は「ユング」についてであるが、ここでは、ユングだけでなく**「フロイト」**についても軽く扱い、それから、最後は簡単に**「うつ病について」**というテーマも軽く扱うことにする。

本書の目的としては、ユングやラカンといった心理学の内容について、「初見でも理解できるようになること」と、「ヌーソロジーと絡めて理解を深める」ことである。ユングやラカンの言っていたことと「ヌーソロジー」とを繋げることで、ユングやラカンの心理学自体に繋がりを見いだすといった目論見もある。そして、行く行くは**「魔術や魔法」**といったジャンルとも繋がりを見いだしていこうとも思う。これによって、「心理学」がより役に立つものになり、「ヌーソロジー」もより役に立つものになってくれれば、幸いだと思う。

本書では「ヌーソロジー」に関する知識の説明は詳しくはせず、前提としてのヌーソロジーの知識は無料公開ページである**『Raimu のヌーソロジー入門』**や、書籍**『ヌーソロジー基本概要＋(プラス)』**のものを用いるため、そちらを参照して欲しい。

＊＊「ヌーソロジー」の簡単なおさらい＊＊

まず、『ヌーソロジー』について軽くおさらいをしておく。心理学や精神分析の分野では、ヌーソロジーで言われている『次元観察子』というものが中心となる概念として出てくるため、そこの所を特におさらいしようと思う。

・次元観察子の階層構造

ヌーソロジーで『次元観察子』と呼ばれるものは、「次元ユニット」とか「霊」などとも説明できるようなものであるが、これは「人間の空間認識の構造」とリンクして出来上がっているものであり、『次元観察子φ1～φ10』までは、それぞれ以下のような階層構造を持っている。

次元観察子φ1～φ2
空間と時間がただ存在する場

次元観察子φ3～φ4
一つのモノを中心に形成される場

次元観察子φ５～φ６

無数のモノと、一つの身体を中心に形成される場

次元観察子φ７～φ８

無数の身体を中心に形成される場

次元観察子φ９～φ１０

上位概念。言語の場と、感覚の場。

『φ１～φ２』の「**空間と時間がただ存在する場**」から、『φ７～φ８』の「**無数の身体を中心に形成される場**」まで、『**人間の元止揚**』と呼ばれて一まとめになるが、『次元観察子』の全体像を掴む場合は、以上のイメージが出来ていると良い。

・奇数系は「自己・精神」寄り、偶数系は「他者・物質」寄り

～ユング精神分析編～

＊＊ユング精神分析について＊＊

■ユング心理学の有り様について

・ユングとはどんな人か？

ここからは、「精神分析」の本論に入ることになる。まず、「**カール・G・ユング**」の心理学である「**ユング心理学**」についてである。これは「**分析心理学**」とも言われている。

まずは「**カール・G・ユング**」とはどういう人物か？について述べていく。

ユングは、１８７５年にスイスで生まれ、死没は１９６１年である。精神科医という立場でありながら、霊能現象やオカルトといったものに関心を持っていた人物であり、オカルティストを兼ねた心理学者として有名である。ユン

グは、幼少期から不思議な夢をみたりしていて、そのような不思議な体験から、心理学や無意識への関心を持つという、不思議体験を色々と持っていた人らしい。

精神科医として、患者の抑圧した感情に興味を持ち、「夢分析」を用いていたユングは、同じく「無意識」の研究の先駆者だった**「ジークムント・フロイト」**に着目する。そこで、１９０７年に初めて会うようになり、年齢的には１９歳年上のフロイトと意気投合する。

しかし、フロイトは「リビドー（性的欲望）こそが全ての精神病の原因である」という、極端なことを主張する人物であった上、ユングは、オカルト現象や霊的現象に関心の強い人物だったため、そういうものに否定的であったフロイトにとっては、その点については快く思わなかった。

フロイトから「国際精神分析協会」という重要なポストを任されていた身であったユングだが、その思想の違いから、次第にハッキリと決別するようになり、ユングは独立して行動するようになる。

こうしたユングとフロイトの決別は、お互いにとってショックが大きく、ユングはこの出来事を機に統合失調症を発症するようになる。しかし、ユングはここで自身に起きた精神の分裂現象は、自分自身が向上するためのものだと捉えて、自身を分析するようになる。

ユングはこのような経緯がある中で、人間の無意識には、自己と他者同士で繋がった領域があるという**「集合無意識」**といった概念を提唱したりする。これは科学的には受け入れ難い、突拍子もない考え方だが、こうした発想を持つ所が、ユングがオカルティストと呼ばれる理由でもある。

また、ユングは、西洋の思想にはない、東洋の思想に着目していた人物である。西洋が正しいと論ずる「近代理性」

や「キリスト教」的な考え方を疑問に思い、東洋や南アフリカといった、自然と共に暮らす考え方を持つ民族に関心を持った。それから、精神分裂の統合の象徴として「曼荼羅（マンダラ）」を導入したりし、自身も様々なマンダラを描いたりする。

このようなユングの思想は、後にアメリカのヒッピーやニューエイジといった人達にも人気が出ることになり、後世でヒッピーカルチャーに影響を与えた人物としてもよく名前が上がる。

・河合隼雄さんの功績

今度は現代日本の話になるが、現代日本にてユングを理解するにおいて、日本のユング派カウンセラーであった**「河合隼雄」**さんの影響は大きいと思う。

まず、ユングの言っていることには特有の難解さがある。書籍が分厚かったりもするし、オカルトが絡んでいることや、夢分析といった手段を用いていることから、ユング心理学を学ぶとなると、それなりに難しさをともなう。

しかし、そうした中でもかなり分かりやすいユング心理学の入門書を書き、学びやすいようにしているのが、河合隼雄さんである。

河合隼雄さんは、元々は数学教師の道を歩むはずの人であったが、それよりもカウンセリングの道に関心を持つようになり、スイスに留学して、本場でユング心理学を学んで、ユング派の精神分析家としての資格を取った人である。

河合隼雄さんは、長いカウンセリング経験を兼ねつつも、ユング心理学を独自に噛み砕いて自分のものにしている

■ユング心理学の内容（元型論）

さて、いよいよユング心理学の内容に入ろうと思う。まずは、**「元型論」**に関する所からである。

本書は、ヌーソロジーの概念と絡めて書くことが目的である。従って、まずは「普通に解説」を書き、そこから「ヌーソロジー的に何が言えるか？」を書くという構成で説明していくことにする。

ここでは、河合隼雄さんの『ユング心理学入門』を主な参考文献としているので、合わせて読んでみると良いと思う。

・「元型」について

まずは**「元型」**という概念についてである。

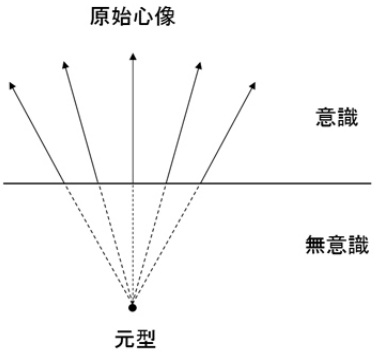
ユングの「元型」については、**「集合無意識」**という概念と合わせて述べられる。

ユングが様々な患者の夢を分析していると、その患者の中には、個人的な「無意識」を超えた、普遍的な「無意識」から発しているようなものが見えた。このように、**人類同士で共通して持っている無意識を「集合無意識」**と呼んだ。

次に、このような「集合無意識」から発しているものの中で、**共通の「型」**が見られたので、それを「元型」と呼んだ。この「元型」は、それぞれの文化に伝わっている、神話や童話や言い伝えにも通じていると言えるものである。

ちなみに、「元型」そのものは、「集合無意識」にある「型」に該当するため、それは顕在意識として現れることは

ない。「元型」が元になって意識に現れる心像が**『原始心像』**と呼ばれるという仕組みになっている。



書籍『ユング心理学入門』によると、ユングが元型として取り上げたもののうち、特に重要なものが、**「シャドウ（影）」「ペルソナ」「アニマ」「アニムス」「自己」「大母」「老賢者」**と名付けられるものである。従って、本書でも、これらについての解説を試みる。

ヌーソロジー的には？

ヌーソロジーは、いわば「精神構造」を明らかにする宇宙論であり、**「具体的イデア論」**とも呼ばれるものである。ここで明らかする「精神構造」は人類普遍として通じているものであり、それは『元型』とも言えるものだと思う。ヌーソロジーの『次元観察子』や『大系観察子』といったものは、まさしくそのようなものである。

■タイプ論について

ユングは、人間を2つのタイプに分けたり、4つのタイプに分けたりすることを提唱した人物としても有名である。この「人間のタイプ」については、フロイトと決別した後にユングが書いた『心理学的類型』という本に書かれている。

そのタイプ分けとは、まずは「**内向タイプ**」と「**外向タイプ**」の2つであり、加えて、「**直観タイプ**」「**感情タイプ**」「**思考タイプ**」「**感覚タイプ**」の4つのタイプが存在する。それらが組み合わさることによって、2×4で、**合計8つ**のタイプが考えられる。

まずは、「タイプ分け」については、それを行う意義が重要な話となる。それは、単にタイプを「分類」するというよりも、4つのタイプを「座標軸」として設定することによって、本人の人格に接近しやすくなることを目的とするべきである。ここで、「分類」をした結果、ただの「レッテル張り」にしかならないようでは、「タイプ分け」には何も意味がないことになる。

思うに、このような分析で心がけるべきことは、「**AであるかBであるか」ではなく、「Aに近いか、あるいは、Bにも近いか**」であったり、「**それによって何が言えるか**」の方が大事である。そもそも、人間の心というものは、移り変わりやすいのが常であり、分別は微妙なものであるため、結果は「多様」なのが基本である。それから、精神分析においては「結局、どうすれば良いのか?」という、とりあえずの着地点を見いだすことが結果として必要になる。

こうしたことを踏まえつつ、ユングの言った「4つのタイプ」について取り上げようと思う。

■ユング心理学の内容（その他）

これまで、「元型」や「タイプ論」について色々と述べていったが、最後に、ユング心理学にて取り扱われていた、**「夢」「集合無意識」「シンクロニシティ」「コンプレックス」「カイロスとクロノス」「マナ人格」**といったことと、ヌーソロジーの絡みについて見ていこうと思う。

・「夢」について

「夢」は、人間が夜に見るものであり、ユングやフロイトが「夢分析」として心理療法に用いていたものである。そもそも、人間が何故、夢を見るかについては、色々と諸説がある。起きていた時の記憶の整理や、神経疲労や脳細胞の回復などと色々あるだろうが、謎が多いものかもしれない。ユングなんかは、自分自身が不思議な夢を見たことがある体験があるから、人間の持っている無意識の謎の探求をしている所がある。

ユングやフロイトによる心理療法では、夢は「無意識に抑圧された感情や欲望が出る場」とされていたので、精神分析においてその内容が重要視された。

さて、筆者も、ユングに興味を持った人間として、「夢」については色々と調べたし、どんなものなのかを自分なりに考えた。そうした中で、筆者の見識としては、「夢」は、ただのストレス解消であるパターンと、無意識の奥底からのメッセージであるパターンとがあるのだと思う。後者の場合は、非常に印象深い感情が残るものである。

それから、自分が色々と調べた中で重要だと思ったのは、**「夢」の世界においては「関係性」が大事**ということである。例えば、夢の中でAという人物とBという人物が出てきて、それで、AとBは何かしらの知人であったり、知っているキャラクターだったり、分かりやすい職業の人物だったりするわけだが、そこで、AとBの「姿」が何で、実際に「誰」であるかは、そこまで重要ではない。それよりも、「AとBがどういう関係なのか」と、それから「自分とどういう関係なのか」の方が大事であり、そこからAやBはどういう「役割」のものを指しているのか?を考えると良い。

また、Xという事象が出てきた時、「それが何なのか?」という問いを出したとして、「〇〇である」という答えが出てきたとしても、恐らく、その「〇〇である」という答えはあまり重要ではない。・・・なんと言ったら良いだろうか・・・。「〇〇である」という答えを用意するということは、〇〇という「名前をつける」ようなものなのだが、そこで名前が付けられた「文字情報」ばかり追いかけることは、あまり重要ではない・・・ということである。

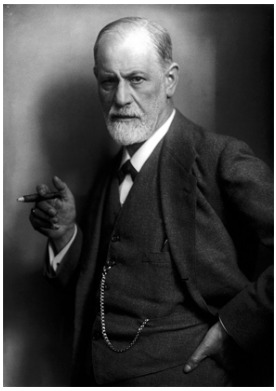
それよりも、その夢から印象を受け取った時、「どう感じたのか?」の方が大事であり、そこで受けた「感じ」が、「何だったのか?」に対する、ダイレクトな「答え」だったりするのである。そうした「感じ」から、夢を見ていて「気付くべきこと」が出てくるものである。

ユングが言っていたように、自分が見ている夢は、他の人も見ている夢・・・というか、その国の文化が持っている「何か」と関係していることもあるかもしれない。そうした場合も、自分の受けた「感じ」と、他の人の受けた「感じ」の「共感覚」を探る必要がある。その場合、「それがどういう名前でどういう姿をしているか。」よりも、「どういう感じのものか。」を着眼点のメインにして、探っていく必要がある。

＊＊フロイトについて＊＊

・フロイトについてざっくりと

これから、ユングの師にもあたり、多くの心理学者や精神分析家にとって多大な影響を及ぼした**「ジークムント・フロイト」**について述べていく。フロイトについては、精神分析学の中心人物ということで取り上げるものの、自分はそこまで詳しいという程ではないので、ここでは簡単に取り扱うことにしたい。



フロイトは１８５６年にオーストリアで生まれ、１９３９年に亡くなった、「ユダヤ人」である。フロイトの特徴としては、精神分析学の創始者としても有名だが、とにかく、**人間の「性」の問題にこだわった人**としても有名であ

る。フロイトが終始一つの物事にこだわり続けたのも、「ユダヤ人」という民族的な要因も恐らくあった。

精神科医としてヒステリー（神経症）の研究をしていたフロイトは、「シャルコー」という神経学者が催眠療法を使用している現場を見て、そこから催眠療法に興味を持って使っていくことになる。ヒステリーの原因を探るには、患者が抑圧した感情を探る他ないと考えたフロイトは、そこから「無意識」の研究に入るようになる。そうした中で、催眠療法は上手く行かないこともあり、試行錯誤の末、「自由連想法」を用いることになったりする。

それから、１８９６年に起きた父親の死をきっかけに、フロイトに転機が訪れることになる。最愛の父を失ったフロイトのショックは大きく、その影響で体調まで崩すようになるが、その後、フロイトは**「近親相姦」の夢を見る**ことになる。この衝撃が非常に大きかったが、フロイトは自身の夢を分析していくことにして、そこから**「オイディプス・コンプレックス」**の着想を得るようになる。そこから、「幼児にも性欲がある」という**「幼児性欲」**という発想も出てくるようになり、「性欲」をベースにするフロイト独自の考え方が出てくるようになる。

その後、フロイトは「性」というタブーを用いながら、持論を展開していくようになるが、その内容の滑稽さから、当時のヨーロッパでは大きく批判を浴びるようになる。そうした中でも、フロイトは、１９００年に**「夢判断」**を刊行し、夢を用いた精神分析の治療法が確立させていき、「ウィーン精神分析協会」を創立する。そこから、**アドラーやユング**といった後の巨匠も集まるようになり、精神分析の界隈はそこから盛り上がるようにもなる。「国際精神分析協会」が設立されるようになり、ユングが会長に任命されることにもなった。

しかしながら、フロイトの言ったことは「人間のすべての悩みの原因は、性的なエネルギーから発している」といった主張であったため、アドラーやユングといった人物が、思想の違いから離れていくようになる。

・「リビドー」について

まずは、フロイトの中心概念と言っても良い、「**リビドー**」についてである。

「リビドー」は、簡単な訳だと「**性的欲望**」などと言われているが、「**性的衝動を発動させる力**」とも言われているし、ユングによっては「**全ての本能のエネルギー**」とも言われている。フロイト的には、それは「様々な欲求に変換可能」なエネルギーに該当する。

もし、患者がヒステリーなどの精神病をわずらっており、抑圧した感情を持っている場合、フロイトの場合は「幼児の頃から育んできたリビドーに原因がある。」という風に解釈しようとする。

このように「リビドー」とは、人間の「性欲」に絡んだものだが、フロイト的には「すべての人間の悩みの根本的な原因」にあたるのである。

ヌーソロジー的には？

思うに、フロイトの言う「リビドー」を、単に「人間の性的欲望」のように捉えると、語弊があるのかもしれない。

ここで、「人間」という枠を超えて「性欲」というものを突き詰めてみると、ありとあらゆる「**二元性**」というものが絡んでくるようになる。特に重要なのは「**父性**」と「**母性**」という「二元性」や、「**自己**」と「**他者**」という「二元性」である。フロイトの言いたかった「根元的な力」とは、どちらかというと、そうした「**根源的な二元性**」が絡んだものであったのかもしれない。

■これまでの用語まとめ

これまでに述べたユング・フロイトの用語と、ヌーソロジー用語との対応をまとめると、以下のようになる。

～元型論関連～

―『元型』―

人類同士が共通して持っている無意識の「型」。

本性は「集合無意識」にあり、

夢において「原始心像」として現れて出てくる。

ヌーソロジーの『次元観察子』も「元型」として解釈できるが、

これは「具体的な構造を持つもの」として、素粒子の構造などと関係がある。

『大系観察子』はそれよりも抽象的なもの。

―『シャドウ』―

簡単に言うと「普段の自分があまり向き合っていない自分」。

ヌーソロジー的には、『次元観察子φ1～φ2』から『人間の外面』に向かう時、

～ラカン精神分析編～

＊＊ラカン精神分析編、はじめに＊＊

『ＮＯＳとＮＯＯＳの精神分析　～ユング精神分析編～』では、「ユング」や「フロイト」について扱っていったが、次はフランスの心理学者・精神分析家である**「ジャック・ラカン」**について扱うことにする。

「ラカン」は、フロイトにシンパシーを感じた心理学者であり、**「パリ・フロイト派」**という一派を立ち上げた人物であるが、フロイトの理論に追従しながらも、独自の精神分析の理論を作り上げていった人物である。

しかし、ラカンの精神分析学（もとい心理学）は、難しいことに定評があり、その内容の難しさから、日本人から「ラカンはわカラン」とか、ダジャレのように言われたりしている。

ラカンの精神分析学は一体、どのように難しいのか？　その難しさについては後ほど述べていくことにするが…、しかしながら、それでいてコアなファンも多い人物であり、ラカンのマニアは**「ラカニアン」**とか呼ばれている。

恐らく、１９～２０世紀にかけての精神分析学において、「無意識」という分野に対して、ラカンほどに「理論的に」解き明かした心理学者はいないだろうと思う。そして、その理論は、同じ精神構造を解き明かしたものとして、宇宙論「ヌーソロジー」とも通じている。

もし、「ラカン」と「ヌーソロジー」との繋がりが見えれば、そこから「ユング」との繋がりも見えてくるようになるし、その他の心理学との繋がりも見えてくるようになると思う。

本書では、ラカンの精神分析学のすべては扱わないことにする。ラカンが精神分析家として活動していた時期は長く、その内容の増築・アップデートもたびたび行われていたため、前期のラカン・後期のラカンを通じて、難しい所

もある。従って、本書で扱っていない分野もあるが、分かるところを確実に理解していけば、難しい所も対処しやすくなると思う。

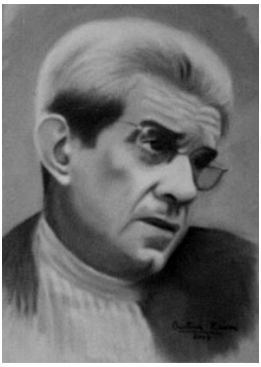
本書では、ラカンの理論と、ヌーソロジーの理論が通じていることを明らかにし、双方とも実用できる見通しが立てれば、ヌーソロジーに関する理解がより広まるのではないか?という目論見の元、ラカンについて扱っていく。

＊＊ラカン精神分析について＊＊

■ラカンについて

・ラカンとはどんな人か？

まず、「ラカン」とはどんな人なのか？についてである。ラカンは１９０１年にフランスのパリで生まれ、死没は１９８１年である。（ちなみに、フロイトは１８５６年～１９３９年である。年齢的には４５歳年上ということになる。）



１９２６年頃、ラカンは**「シュルレアリスム運動」**に影響を受けているという所が重要であり、精神医学を専攻し

・「人間は人間でないものを知っている」

まず、ラカンの主張がよくまとめられている言葉を紹介していきたい。

ラカンは「短時間セッション」という斬新なことをしていたわけであるが、これは、「時間」と「人間の自我の形成」とが関わりのあるものとして、ラカンは考えていたからである。ラカンは、人間の自我の形成（これは言い換えるならば「自己規定」とも言われる。）について、以下のように3段階に分けて要約した。

（※書籍『ラカンの精神分析（講談社現代新書）』より引用）

・人間は人間でないものを知っている。
・人間たちは人間たちであるために互いの間に自分を認める。
・私は人間たちによって人間でないと証明されるのを恐れながら、自分は人間であると断言する。

以上の要約は、**「短時間セッションの論理的裏付け」**として挙げられた、自己規定のプロセスなのであるが、論理的裏付けがどうこうというより、なかなかインパクトのある台詞だと思う。

「人間の自我」と「時間」と「短時間セッション」の関係について、詳しくは後述するが、ラカンの理論は、はじめから「人間でないもの」を想定しているような所があり、そこから、「自己」と「他者」との関わり合いの中で、「人間らしいもの」が生まれてくるという内容になっている。

■ラカン心理学の内容（鏡像段階論とＲＳＩ）

ここから、ラカンの言っていた心理学の内容について述べていくことにする。まずは基本として押さえやすい「**鏡像段階論**」を初めとして、「**象徴界**」「**想像界**」「**現実界**」という三つの概念について説明していく。それから、ヌーソロジー的にはそれらは何に対応しているのかについても、同様に説明していく。

・「鏡像段階論」について

まず、ラカンの心理学のスタートであり、「基本」となっているのは『**鏡像段階論**』である。この「鏡像段階論」とは何か?について、順を追って説明していこうと思う。

人間は、幼児の段階においては「自分が自分である」という感覚を持っていない。ただ単純に「目の前に光景がある」というのを認識しているだけで、我々が一般的に見ているように「立体物で構成された世界」という風には見えていない。

それから、自分の「身体」に関してもバラバラに認識しているにすぎず、目の前に見えている光景と、自分の持っている感覚に繋がりを見出し、「自分は身体を持っている人間である」という認識を持つには至っていない。

そこで、成長するにつれて段々と「他者からの視線」があるというのを意識するようになり、「他者にとっての自分」というのがあることに気付くようになる。その時、「他者からこう見られているであろう自分」というイメージ

から、「自分の身体像」というのを形成していくようになる。その身体像は、「鏡に映った自分」のように「客観」的な姿から作られているとも言えるので、**「鏡像」**だと言うことができる。そして、**「人間の自我」はこの「鏡像」をベースに作られている**ということを言っているのが、ラカンの「鏡像段階論」である。

「鏡像段階論」において「自分がこう見られているであろう」というイメージから、自身の「自我」が出来上がるということであるが、この自我は**『想像的自我』**と呼ばれている。

人間の自我は「鏡像」という、**「他者からの視線」によってできたもの**に基盤を持つというのが、まず、ラカンの理論において重要なポイントである。

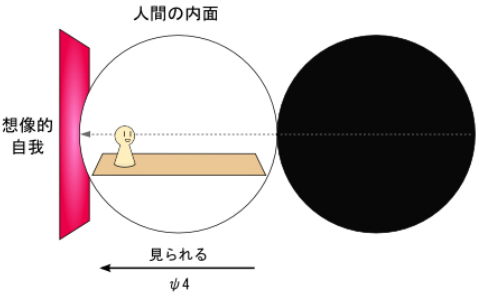
ヌーソロジー的には？

さて、「ヌーソロジー」は、半田広宣さんによって、「宇宙論」だとか「具体的イデア論」という風に言われているが、実は、「自己」と「他者」の関係性によって出来る**「自他論」**でもあるということを、半田広宣さんは言っている。ラカンの「鏡像段階論」のように、**「自己」と「他者」の関係から生まれる精神構造**というのは、むしろ、ヌーソロジーの真骨頂とも言える所なのである。

まず、「鏡像段階論」においては、**「見られている」という意識によって、自分が形成される**という所が重要である。ヌーソロジー的には、「見られている」という意識の場には**「客体」**というものが存在している。そして、それとラカンの話をすり合わせると、**この「客体」をベースにして、「想像的自我」**が生まれていると言うことができる。

それから、「客体」はヌーソロジーの観察子でいうと、『次元観察子φ4』に対応している。これは、ヌーソロジー

の実践において、スタートの方で出てくる概念である。



このように、ヌーソロジーにおける人間の自我形成では、まず、**「見られている」という意識と『次元観察子φ4』に対応する「客体」が出てくる**のである。

そして、あくまでこれは、自我形成のスタートの部分であり、人間の自我は、そこから発展してさらに完成に向かっていくようになる。ヌーソロジーにおける自我形成の仕組みについては、詳しくは、本書にある**『人間の自我構造の発展』**の節で述べていくことにする。

■ラカン心理学の内容（名とイメージの関係とシェーマL）

・「シニフィアン（名）」と「シニフィエ（イメージ）」

次は、『シニフィアン』と『シニフィエ』という概念についてである。これは、ラカンの提唱した用語というよりも、「ソシュール」という言語哲学者によって定義されたものらしい。しかし、ラカンの心理学においてよく出てくるため、ほとんどラカンが提唱したように思えるぐらい、ラカンによって使いこなされている上に、これもほとんどラカンの精神分析の中核として組み込まれている概念である。

「シニフィアン」は簡単に言うと「記号表現」、「シニフィエ」は簡単に言うと「記号内容」だと説明されている。・・・しかし、この二つは、他にも言い換えて説明することが色々と出来るものでもある。二つの意味をそれぞれまとめると、以下のようになる。

～シニフィアン～

記号表現、能記、象徴、名

例：「海」という文字や、「うみ」という音声

～シニフィエ～

記号内容、所記、概念、イメージ
例：海のイメージや、海という概念、ないしその意味内容

それぞれ以上のような意味であるが、ここでは分かりやすいように**「シニフィアン」＝「名」**と**「シニフィエ」＝「イメージ」**という言い換えを採用することにする。

ここで、「シニフィアン」は「単一の名」を意味していて、「シニフィエ」は「単一のイメージ」を意味している。そして、**「シニフィアン（名）」が連鎖している世界が「象徴界」**であり、**「シニフィエ（イメージ）」が交わり合って膨らんでいる世界が「想像界」**でる。

ここで、ラカン的には、**「シニフィアン（名）」は「現実界」と絡めて考えられる**こともあるため、**「普通に認識できるもの」ではない**ことを押さえておいてもらいたい。「シニフィアン」とは、あくまで純粋な「名」であり、「文字」として表記されている「名」を、無心で見たときのものが「シニフィアン」である。あるいは、イメージを抜きにした純粋な「音」として聞こえるものが「シニフィアン」である。

「シニフィアン（名）」を認識する時は、少しでもイメージが発生すると、「シニフィエ（イメージ）」に落とし込まれてしまうため、注意が必要なのである。

ヌーソロジー的には？

「シニフィアン（名）」と「シニフィエ（イメージ）」は、ヌーソロジー的には何と関係しているだろうか？

■人間の自我構造の発展

・人間の自我形成の仕組み、その１：空間認識のレベル

ここで、ラカンとは少し脱線して、「**ヌーソロジーにおける自我形成の仕組み**」の話をしていくことにする。何故なら、ヌーソロジーにおいて言われている「人間の自我形成の仕組み」は、ラカンの「鏡像段階論」とかなり近いため、合わせて理解しておくと良いからである。それは、基本的には「**見られる**」ということをベースにして発展しているものである。

加えて、ヌーソロジーによって明らかになった自我形成の仕組みは、人間の空間認識の仕方と紐付いているものであるため、その内容は、既存の精神分析学には見られないほど、明確で具体的な情報となっていると思う。

ヌーソロジーにおける人間の自我の形成は、**『次元観察子φ1～φ8』に対応した「4段階」**で一旦の区切りが存在する。そのため、まずは「段階1～段階4」から、順を追って説明していくことにする。

1：空間があるという段階

（※次元観察子φ1～φ2に対応）

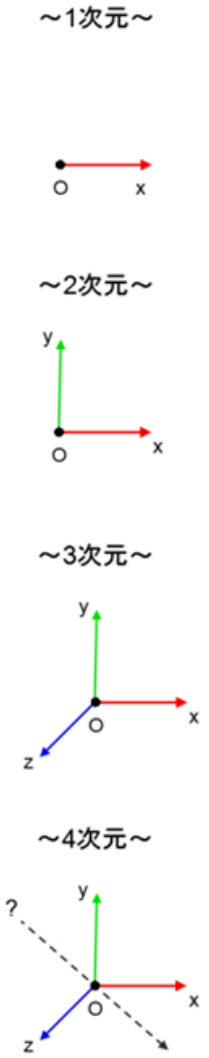
人間の自我の形成は「幼児の空間認識の仕方」から起きているものであり、まず始めにあるのは「**空間があるとい**

■4次元で読むラカン

・「4次元」で読むとラカンは分かりやすい？

ここで、再度脱線して、今度は「**4次元**」の話をしつつ、それとラカンの理論とを絡めていこうと思う。

まず、「4次元」とは何なのだろうか？　一般的には、単純に「4次元」というと、「**4次元時空**」と「**4次元空間**」の二つの場合を指すことがある。「4次元時空」とは、「3次元の空間＋1次元の時間」のことであり、早い話が「この世界」のことを言っているのだが、それに対し、「4次元空間」は、「この世界」に対して、新しい空間の軸を一つ加えたという、いわば「この世界にないもの」である（ちなみに、ドラえもんの『4次元ポケット』なんかは、そちら側の「4次元」を指している）。



ここで、「4次元」という概念とラカンの理論を絡めて考えてみると面白く、双方を合わせて学ぶことで、理解を

■「人間の欲望の根本原因」と「対象ａ」について

・「対象ａ」について

さて、話をまたラカンの精神分析に戻そうと思う。

ここで、ラカンが提唱した重要概念である『**対象ａ**』について、書いていくことにする。

これは、ラカンがよく言っていたことである「人間の欲望は他者の欲望である」という台詞ともよく絡んでいる概念である。

「対象ａ」とは、まず、簡単に説明すると「**人間の欲望の根本的な原因となるもの**」といった意味のものである。

しかし、これについてラカンが言おうとしていたことについては、そんなに簡単に説明できるものではない。

ここで、ラカンの講義録である『精神分析の四基本概念』にて、「対象ａ」の記述が出てくる所を引用すると・・・

「対象ａは欲望の中心欠如を象徴化する機能」

「対象ａとは、主体が自らを構成するために手放した器官としてのなにものか」

「対象ａはあるときは主体以前のものであり、あるときは主体の同一化の基礎であり、またあるときは主体によって否定された同一化の基礎」

■「父の名」や「ファルス」について

・ラカンによる「オイディプス・コンプレックス」解釈

ラカンは、フロイトの影響を受けて「パリ・フロイト派」を立ち上げた人物であるが、フロイトは「**オイディプス・コンプレックス**」というものについて提唱したことで有名である。この「オイディプス・コンプレックス」については、後の『**オイディプス編**』の所で詳しく説明するが、簡単に言うと、それは「**父**」と「**母**」と「**子**」**を巡る物語**から生まれるものである。

フロイトが言うには、最初、子供にとって「母」は唯一の性的な対象である。しかし、その「子」と「母」の関係の中に「父」が入り込み、その関係を邪魔する障害物となる。そうした絶対的な強者である「父」との関係による葛藤から生まれるもの・・・というのが、大まかな「オイディプス・コンプレックス」の内容である。

そして、ラカンは、フロイトに続いて「オイディプス・コンプレックス」について言及し、そこで「ファルス」や「父の名」といった独自の概念を提唱しながらも、独自路線でこれを掘り下げていった。

この節では、そのことについて説明していく。

■これまでの用語まとめ

これまでに述べたラカンの用語と、ヌーソロジー用語との対応をまとめると、以下のようになる。

～基本関連～

―『鏡像段階論』―

幼児は元々、自分の身体像を持っていないが、
他者からの視線や、そこから作られる「鏡像」から、
自分の身体像や自我を形成していくという理論。
ヌーソロジー的には、「見られる」という意識と、
『次元観察子φ4』によって「客体」が形成されて、
人間の自我が生まれるという理論と繋がる。

―『想像界』―

「想像的自我」が形成される場。
映画「マトリックス」だと、仮想世界マトリックスに対応する。

～オイディプス編～

オイディプス編、はじめに

今回から始まる章のメインテーマは「**オイディプス**」である。

「オイディプス」とは、心理学において、フロイトが『**オイディプス・コンプレックス**』として扱った、重要概念である。哲学の間でも「**ドゥルーズ＝ガタリ**」による『**アンチ・オイディプス**』という書籍で追求されているものとして有名である。「オイディプス」の問題は、端的に言うと「父なるもの」を巡る問題であり、幅広い分野に通じている。

しかし、ここから先は、「オイディプス」というテーマが広く色々なことに通じているため、割と幅広い範囲のテーマについて書いて行こうとも思う。

そこで、まず始めに、これまで語ることのできなかった心理学者である「**アルフレッド・アドラー**」の話を、軽くしていこうと思う。

筆者の専門は、割と「ユング」と「ラカン」の二人の心理学者のつもりだったが、「アドラー」という心理学者も、今、世の中では割と注目されている様子であるので、それをいくらか押さえつつ、ヌーソロジーの概念とも紐づけていくことにした。

そして、「アドラー」について述べた次は、いよいよ、「オイディプス」についてと、それと現代社会とを絡めた問題についても述べていくことにする。

それから、最後に、「オイディプス」の問題を解決するものとして、「**魔術・魔法**」というジャンルについても述べ

ていくことにする。

＊＊アドラーについて軽く＊＊

・アドラーとは？

「アルフレッド・アドラー」（１８７０年～１９３７年、オーストリア生まれ）は、割と社会派な心理学者として知られている人物であり、ユングと同じく、フロイトの元に集まっていた弟子のうちの一人である。（しかし、弟子という言い方には異論があり、独立した考え方を持った心理学者と言った方が良いみたいである。）

医師として開業をしていたアドラーは、フロイトの著作『夢判断』を呼んで、精神医学に興味を持ち、フロイトと

・「劣等性」と「差異」とについて

アドラーの言った「劣等感」についてもう一つ言えることとして、これは、**「同一性」**と**「差異」**の関係とも絡んでいる問題でもある。

「同一性」と「差異」とは、ヌーソロジーでも使われている、哲学の用語であるが、「同一性」は**「何かと何かを同じとして見る性質」**のことを言う。対人関係においては、「誰かと誰かを同じとして見る性質」と言っても良いと思う。その一方で、「差異」は「同一性」と逆の意味であり、**そこにある「違い」**のことを言っている。

アドラーの言う「劣等感」が生まれる背景には、そもそも、「同一性」という人間が誰しも持っている性質がある。人間社会でよくあることとしては、まず、「優越者」のモデルというのがある。例えば、学校の成績が良い者、運動ができる者、良い大学に言って良い企業に就職してお金を多く稼ぐ者・・・などがその代表といった所だろうと思う。そうなってくると、**「人間はそのモデルと同一になれるものなのだ。」**という価値観が出てくるようになり、皆がそれを目指すようになる。そこで本当は身体的なハンディや、違いによる得手不得手が存在するのだが、「同一性」が働いている場合はそうしたものは無視される。そして、そのモデルに真似するのに不利であり、実際にできない者を「劣等者」だと扱うようになる。

しかし、そもそも**人間には「差異」があるものだ**という前提に気づいていれば、このようなことは起きないものである。身体的に違いがあるのだから、モデルを真似できない者がいるのも当たり前である。このように、それが当たり前であるとした上で、世の中に役立つためには何をすれば良いか？　世間では不利のように扱われているけれ

オイディプスについて

・「オイディプス」とは何か？

さて、いよいよ今回の**『オイディプス編』**のメインテーマとなる**「オイディプス」についてである。**

まずは、「オイディプス」とは何か?についてだが、これは、元々は古代ギリシャの紀元前４２７年頃に書かれた**『オイディプス王』**と呼ばれる神話から来ている名前である。（読み方の問題で、**「エディプス王」**とも呼ばれることもある。）

その神話の内容から、フロイトが**『オイディプス・コンプレックス』**というものを提唱するようになる。（これは、よく**「エディプス・コンプレックス」**と呼ばれることもあるが、ここでは「オイディプス」に統一することにする。）

このフロイトが言った「オイディプス・コンプレックス」の問題を、後にラカンやドゥルーズといった人物が取り上げて、そこからさらに発想が広がっていくようになる。特にドゥルーズにおいては、「オイディプス」は全く違った概念として扱われるようになる。

ここで、それらについてそれぞれ説明していくことにする。

■「父性原理」と「母性原理」

・「父なるもの」と「西洋」の関係

これまでの「オイディプス」の説明では、つまり、『アンチ・オイディプス』的な「オイディプス」は、ありとあらゆる「父なるもの」が発端となっており、それとの関係が上手くいかなくなった時に起きる・・・というのが、「オイディプス」を巡るストーリーである。これは本来の「オイディプス王」の神話の内容とは大分異なっているが、ここではそういうものとして扱おうと思う。

ここで、「父なるもの」は「父性原理」として、**「父性原理」と「母性原理」の二つ**について、今一度、掘り下げていこうと思う。

ユング派のカウンセラーとして有名な、河合隼雄さんによる「父性原理」と「母性原理」の説明を再度復習すると、以下のようになる。

父性原理	母性原理
機能：切る 目標：個人の確立 　　個人の成長 人間観：個人差（能力差）の肯定 序列：機能的序列 人間関係：契約関係 コミュニケーション：言語的 変化：進歩による変化 責任：個人の責任 長：指導者 時間：直線的	機能：包む 目標：場への所属（おまかせ） 　　場の平衡状態の維持 人間観：絶対的平等感 序列：一様序列性 人間関係：一体感（共生感） コミュニケーション：非言語的 変化：再生による変化 責任：場の責任 長：調整役 時間：円環的

通説では、**「父性原理」は西洋諸国**においてよく見られ、**「母性原理」は東洋諸国**においてよく見られる。

そして、「精神分析」というジャンルは、当然、西洋から出てきたものであり、それはフロイトという人物によって始められたが、そのフロイトは執拗なまでに「オイディプス・コンプレックス」というものと、「父との関係」というテーマにこだわっていた。ここで「父」に該当するものは、恐らく、肉親としての「父親」のみを指しているのではない。フロイトはユダヤ人であったため、ユダヤ人にとっての「父」とは、あの「ユダヤ教の神様」が挙げられるものでもある。

それから、西洋人にとっての「父」は、ユダヤ教の神様だけではない。西洋諸国というと、科学技術の発展が著しかった国々であり、特に１９世紀や２０世紀にかけては、産業革命による勢いが強かった時代である。・・・フロイトは熱心なユダヤ教徒と言うよりは、「科学的な視点」で物事を見ることにこだわっていた人物であるため、フロイトが「父」とするものは、どちらかというとそうしたものかもしれない・・・つまり、西洋にある屈強な科学技術や、政治のシステムなどを作り上げた、**「近代理性」という「父」**である。

「西洋」は、科学の発祥の場所であり、それから、西洋で普及している「キリスト教」や、一部の優秀な人間が信じる「ユダヤ教」は、一神教の宗教であるため、そうした**一神教的なものが支配している文化**を持つのである。従って、そうした「父」が生み出すものが、広い意味での「オイディプス・コンプレックス」だということが言える。

フロイトは肉親である父親を指しての「父」を言及して「オイディプス・コンプレックス」を提唱していたかのようであったが、ドゥルーズ＝ガタリは、それをもっと普遍的なものとして拡張したため、ここでの「オイディプス」は、かなり広い意味のものを指すようになった。そもそも、フロイトが言いたかったことも、西洋人が持つ特有の「父

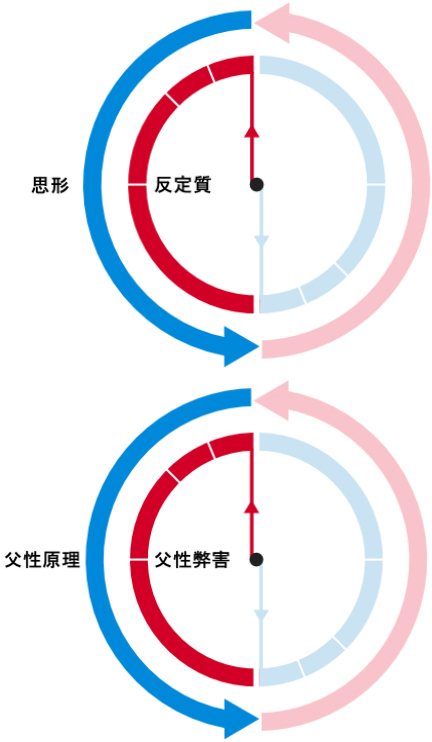
■「オイディプス」と「虚栄心」

・現代日本で権力を持つもの

さて、ここからは現代社会の話にも入っていこうと思う。

まず、先ほどの「父性原理」と「母性原理」の話のおさらいであるが、「父性原理」と「母性原理」は、双方において、それぞれ「弊害を生む要素」があるという話であった。

それは、ヌーソロジーにおいて『ケイブコンパス』に当てはめることもできる。



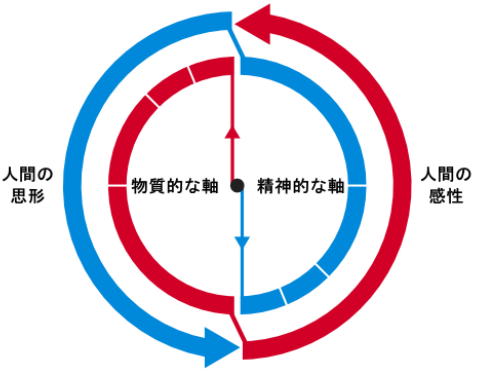
■「物質的な軸」と「精神的な軸」について

・二つの軸について

これまで、**父性的なものが作る「オイディプス」**と、**母性的なものが作る「虚栄心」**という二つの存在について説明してきた。

ここで、人間の世界には**「父性的なものが作る軸」**と**「母性的なものが作る軸」**の、二つの主軸があると捉えると良い。それは、ここでは**「物質的な軸」**と**「精神的な軸」**と呼ぶことにする。

そして、人間の世界において、この二つは、ヌーソロジーの『ケイブコンパス』によると、以下のように対応するわけである。



図の左側に「物質的な軸」があり、図の右側に「精神的な軸」というのがある。メインは、内側の『偶数系元止揚』と『奇数系元止揚』にあり、それぞれ、外側の『人間の思形』と『人間の感性』がそれを支えている。

それから、『人間の思形』の『ノウス（ＮＯＳ）』の力を『ノス（ＮＯＳ）』に上書く『等化』側の力と、『人間の感性』の『ノス（ＮＯＳ）』の力を『ノウス（ＮＯＯＳ）』に上書く『中和』側の力というのがある。それは、それぞれ『人間の性質』と『人間の定質』と呼ばれ、『次元観察子』の『φ１２』と『φ１１』に該当し、これは人間の世界にある「最高位の対立物」として存在している。つまり、「物質的な軸」と「精神的な軸」の二つは、『人間の性質』と『人間の定質』によって確固たるものになっているのである。

■オイディプスに対抗する「知性」

・必要な「知性」とは何か？

さて、ここまで「父性原理」側にある「オイディプス」と「母性原理」側にある「虚栄心」について説明したり、「物質的な軸」と「精神的な軸」の二つについて説明したりしていった。

それらが作り出す「ジャパニーズ・オイディプス・コンプレックス」では、外来の資本主義的な考え方が社会の主導権を握っていく中で、日本の「母性」的な要素に「父性」書かれるようになり、「父性」的な勢力からも圧力がかかるようになるし、「母性」的な要素がそれをより閉鎖的にするという、ダブルバインドのような状況が起きているというわけだった。

ここで、我々が身につけるべきこととは何なのだろうか？　それは、**「自分の頭で考える知性を身につける」**ということだと思う。

基本的には、こうした物事に対して「誰か」を責めた所で、なかなか世の中は動かなかったりする。「父性」と「母性」の在り方は、社会においてはかなり複雑な状況下で動いているものであるため、それを理解するためには、優れた「知性」がいることである。

それから、それらの「父性」や「母性」といったものの弊害は、とにかく、**人々を「考えさせない」ような方向に持っていってしまうもの**である。仮に、「誰か」がそうした陰謀を企んでいて、それによって世の中が動かされてい

＊＊魔術・オカルティズムとの絡みなど＊＊

これまで、「オイディプス」についてや、そこからさらに派生した「虚栄心」というものについて、現代社会の問題にまで絡んだものとして述べてきた。

ここから、それに対して「どう対抗していけば良いか」ということや「どう生きていけば良いか」ということへとも繋がっていく、「魔術」や「オカルティズム」の話をしていこうと思う。

・魔術のカウンターカルチャー的側面

まず、**「魔術」とは何か?**という所から説明していこうと思う。

「魔術」の定義は非常に幅広いものが考えられるのであるが、１９世紀あたりの近代において**『黄金の夜明け団』**という魔術結社が出てきて、後に出てくる魔術結社や「西洋魔術」といったジャンルも、それの影響が大きいため、そのようなイメージで「魔術」を捉えるという風潮が強い。

ここで、「魔術」の持つ思想について、**古代エジプト**のあたりにまでさかのぼると、元々は「一神教に対抗する力」として魔術のようなものが出てきたということがある。古代には、「一神教」のように「神を信じる」という立場があったわけだが、それに対して「多神教」を信じる立場であったり、「自らが神のようになる」というような思想の立場が出てきた。後に出てくる魔術も、そうした態度に近い思想を受け継いでいるため、「魔術」は、このように「一

神教に対するカウンターカルチャー」として始まっていたと言えるものである。

このような「カウンターカルチャー」として機能していた「魔術」がメジャーとなることは、これまであまりなかった。何故なら、一般人や大衆にとっては「一神教」の方がメジャーであったり、「目に見えるもの」をベースにした、分かりやすい思想の方がメジャーなものとして君臨していたからである。そうした中で「魔術」のようなものは「隠されたもの」として扱われるようになった。この**「隠されたもの」というのが、本来の「オカルト」の意味**であり、それを探求するのが**「オカルティズム」**である。

このような「魔術」や「オカルティズム」といったものが、西洋において形を変えつつも、影で脈々と伝えられていった・・・。そして、19世紀にあった魔術結社である『黄金の夜明け団』に至るようになる。そこで扱われる「魔術」も、紀元前にあったエジプトの文化や、そこから派生したユダヤ神秘主義である**「カバラ」**などの影響を強く受けている。

それから、現代においては、**「科学」や「資本主義」や「唯物論」**といったものが、まるで「一神教」かのように君臨しているため、**それに対する「魔術」が機能する必要がある**と言うことができる。「唯物論」で信じられているものは、いわば「目に見えるもの」であるが、それに対して、「魔術」では「目に見えないもの」を扱うということになる。従って、このような**「目に見えないもの」を扱うことが、広義においての「魔術」**だと言うことができると思う。

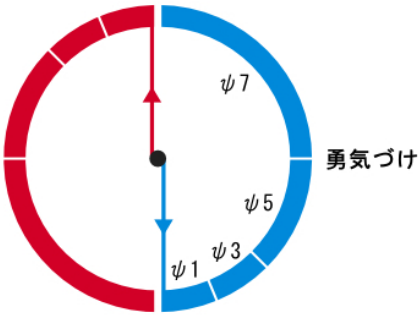
そして、それを扱う目的は、流派や思想によって色々ある・・・というのも、現代における「魔術」や「魔法」のあり方だと思う。

・「勇気づけ」の手段としての魔法

これまで、「父性原理」の作り出す「オイディプス」という弊害について説明してきたし、それから、現代社会においても、なかなか解決できない問題が、世の中を覆っているということについて述べてきた。

それでも、自分自身が本来望むことである、「自己」を先手にして、能動的に世の中を生きていくために必要になるのが、アドラーの言った**「勇気づけ」**である。また、アドラーの「勇気づけ」は、**「劣等コンプレックス」を克服する**ことにも繋がるもの・・・というわけであった。

アドラーの「勇気づけ」について、再度『ケイブコンパス』を引用して説明すると、以下のように『奇数系観察子』を先手にして生きるためのものが、アドラーの言った「勇気づけ」である。



ここでポイントとなるのは、アドラーが「勇気づけ」を行う所が、「魔術や魔法」の持っている力と一致している所である。これが何を意味するのかというと、つまり、「魔術や魔法」は、**自分で自分を「勇気づけ」する効果を発揮する**ものになるということである。

だからこそ、「魔術や魔法」は現代において必要なのだと思う。

・4種の「オイディプス」的な弊害について

これまで、「オイディプス」というものについて本書で説明していったが、ここで「オイディプス」を「創造によ

・「日本神話」で表現されていること

ここで、「日本」という国について述べていこうと思う。

『「父性原理」と「母性原理」について』の節の所で説明したが、「日本」という国は、**「父性」的な側面と「母性」的な側面、それから、「一神教」的な側面と「多神教」的な側面を二つ持っている**かのように、特殊な性質を持った国である。

一方で、西洋の思想は「一神教」で代表されるものである。一番象徴的な「一神教」は、ユダヤ人の持つ「ユダヤ教」であるが、「キリスト教」も同様にユダヤ教の派生物であり、一神教としての性質を持っている。従って、そうしたものを信じるのが、西洋にとってメジャーな文化とされている。

しかし、日本人はそうした「一神教」的な性質と、「多神教」的な性質を合わせ持つという二面性があり、その思想は「神道」や「日本神話」にも表れている。**「一神教」は神道において「アマテラス」的な側面**が持っており、**「多神教」は神道において「スサノオ」的な側面**が持っている。そして、それらが「和する」のが日本神話の目的なのである。・・・ということを先ほども説明した。

日本のこうした思想は、中には悪い方面に向かうこともあり、そこで悪い方面に向かうと、**「母性に父性が上書きされる」**ことによって、**「オイディプス」と「虚栄心」の二つにダブルバインド**されるという、父性弊害が起きつつも、母性弊害によって閉じこめられてしまうような状況が起きてしまうわけである。しかし、こうした最も悪い性質というのは、逆に考えると最も良い性質の裏返しでもある。このように、「日本」という国は世界的に見ると珍しい性質

※このサンプルは内容の一部を抜粋したものです。